

3. 平成29年度事業項目ごとの実施報告

事業テーマ	計画及び数値目標 (P)				活動実績 (D)	評価 (C)			改善点 (A)
	成果		活動			成果目標に対する評価	活動目標に対する評価	総合評価	
	目標	指標	目標	指標					
①講演会及び教員研修会	生徒には、自身と世界のつながりを考えさせ、グローバル社会で活躍できる自己の実現に向けて努力する意欲を高める。 豊かな英語(言語)運用能力・コミュニケーション能力(聞く・話す・読む・書く技術)や異文化体験を身につけさせて、国際感覚を養成し、グローバルな舞台に挑戦する人材を育成する。 また教員は、教員研修によってグローバル人材の現状と必要性及び育成方法等の知識を深め、育成能力を向上させる。	生徒 (1)アンケートによる自己評価 (2)エッセイコンテストや弁論大会等への参加 (講演等：目指す人材像、グローバル社会への対応、必要とする知識、今後の具体的対応等、生徒及び教員の視点から目標に向けた考察や事業前及び事業後の現状認識を把握し、目標実現に反映されたか確認するとともに、具体的な生徒のエッセイコンテストや弁論大会等の参加状況を確認) 教員 (1)アンケートによる自己評価 (2)研修により習得した指導法による指導時間数 (教員研修：研修報告の研修成果等、事業前及び事業後の知識度や取組みの実践度等を具体的な指導時間数を含め、把握し、目標実現に反映されたか確認)	グローバル人材育成に取り組む大学や企業、団体等の職員による生徒対象の講演及び教員対象の研究や平和学習において、他国の現状や歴史的背景についても知識を深めるとともに、英語以外の教科においても世界で起きている事柄も他人事ではなく自分のこととして考えるなど、グローバルマインドの醸成に取り組む。また、教員のグローバル教育先進校等の視察研修を実施し、求められるグローバル人材像の形成の現状を把握、比較し、本校が目指すべきグローバル人材像を確立させ今後の教育・指導の活性化に資する。	(講演) ①実施日：6月29日(木) 会場：純心女子高等学校 講師：長岡市国際交流センター長 羽賀友信氏 対象：純心中学校・純心女子高校全学年 内容：グローバル講演会 (研修) ②実施日：6月29日(木) 会場：純心女子高等学校 講師：(同上) 対象：純心中学校・純心女子高校教員 内容：教員対象研究会 (教員のグローバル教育セミナー・先進校視察研修)実施日：7月～翌年3月 対象：教員7名程度 (講演・セミナー) ③実施日：6月29日(木) 会場：純心女子高等学校 講師：長岡市国際交流センター長 羽賀友信氏 対象：純心中学校・純心女子高校全学年 内容：グローバル講演会 (研修) ④実施日：6月29日(木) 会場：純心女子高等学校 講師：(同上) 対象：純心中学校・純心女子高校教員 内容：教員対象研究会 (研修) 5月27日(土)次世代教育セミナー(福岡市) ISAIによる国際教育、各種プログラム紹介 対象：教員1名 6月22日(木)先進校視察(佐世保市) 聖和女子学院中学高・学校 対象：教員6名 10月28日(土)共創ワークショップ(大阪市) グローバルICT教育 対象：教員1名 11月25日(土)グローバル教育セミナー(福岡市) 事例紹介、研究発表 対象：教員1名 2月2日(金)～3日(土)大阪府能勢町 府立能勢高等学校SGH研究発表会 能勢ささゆり学園教育発表会 対象：教員2名 2月17日(土)静岡県三島市 日本大学三島高等学校「#徹底公開@日大三島」 県グローバルハイスクール事業成果発表会 対象：教員3名 (講演・セミナー) ⑤実施日：8月10日(木) 会場：純心女子高等学校 講師：NGOユイメール創始者 照屋朋子氏 株式会社ベンダゴ代表取締役 日賀優一氏 対象：高1高3希望者、教員、卒業生(約70名) 内容：講演会・ワークショップ(ワールドカフェ) ⑥実施日：1月4日(木)～8日(土) 会場：純心女子高等学校 講師：本校教諭・長崎大学留学生 対象：高1、2、3 (約50名) 内容：異文化理解ワークショップ、英検対策他	生徒 講演会後の生徒アンケート結果からは、講演を通じて生徒たちが自らの置かれた環境に関する客観的な理解を深め、学力やコミュニケーション能力が地域社会やより広い世界と関わるための重要な手立てであることについて改めて認識し、より積極的かつ自律的に努力できるようになったことを確認できた。 教員 年度末の教員アンケート結果からは、教員の資質として生徒の論理的思考力や表現力、探究などを一層育むために、知識の伝達だけに止まらず、学ぶことと社会のつながりを育む意識し、英語運用能力をバランス良く育むための授業実施に重要性がさらに意識されていることが分かった。特に実際の授業の中での実施状況・指導時間数に関しては外国語授業の84%においてグローバル教育を意識した教育実践が行われている。また全教員が内外の研修や個人的な研鑽によって資質向上に努めることができたことと解答した。	計画されていた講演会や活動、研修会への参加はおおむね実現できた。指導に関しては、個人のレベルでは授業での実践の改善など前進がみられるものの、学校全体の取り組みとしては昨年度末と同様にまだ十分ではない。また例年通り外部コンクールや弁論大会への参加だけでなく、高校生向け国内外の各種研修に多くの生徒が参加した。	英語科や国際教育委員会に属する職員だけでなく、キャリア教育委員会、ICT教育委員会などの、校内の多くの職員がグローバル教育に関する関心を深め、それぞれの立場で何をどのように進めていくか理解が進んで生徒への指導に活かされつつある。特に本校の創立案の一つである「隣人愛」は、より良い人間関係、社会を形成していくための普遍的な価値であり、理想的なグローバル社会実現のために不可欠な要素であることが職員間で確認された意義は大きい。 具体的には、生徒への動機づけとしても新たな企画は常に必要だが、すでに実施されている授業や学校行事のなかにもグローバルな意義を再発見し、生徒に意識させ、生徒自身の成長へとつなげていく必要がある。	文部科学省は平成29年度には新たなSGH指定校の採用を見送るなど、全国的な取り組みとして一部に活動の縮小傾向もあり、外部での研修会数も減少している。しかし情勢として今後ますます社会のグローバル化は避けられず、グローバル教育の必要性はいささかも減ることはない。従って本校でもより内容の濃い有意義な教育活動へと発展させるよう今後努力する。 一教科としてグローバル教育が存在するわけではないので、英語授業や関連行事以外でも、生徒への恒常的な働きかけや動機づけとなるような行事等の実施は今後必要である。また教科横断的な取り組みも有効であることは他校の事例から明らかなので、本校での研究や実施が今後の課題である。 授業や行事などの教育活動の中で本校のグローバル教育理念をどう顕在化させ、生徒に気づかせていくのか、現在は主として教員各個人の努力が中心だが、3年間もしくは6年間の見通しの中で、各教科、各学年、学校全体で共有し体系化させていく努力を継続する必要がある。	
②韓国テレサ高校ホームステイ受け入れ	歴史認識を含め相手国について事前学習し、交流によって互いの理解を深め、相手国へのイメージを改善し、両国の関係をより良好にしていきたいという意欲を育成する。	生徒アンケートによる自己評価 (受入交流：おトクミ、おトクミ、おトクミ、英語(言語)運用能力・コミュニケーション能力(聞く・話す・読む・書く技術)、平和への取組、グローバル化への取組、交流成果等、双方の生徒等から意見や考察を収集し、事業前及び事業後の交流意欲の醸成度を把握し、目標の実現に反映されたか確認)	韓国入高生と一輪に原爆資料館とハウステンボスを訪問し、平和や外交の歴史について語り合い、相互理解及び国際交流の推進に資する。なお、授業交流では、多くのクラスへの訪問を計画し、高校全体への波及効果を高める。また、滞在時間も限られており、本校生徒との交流時間を確保するため、福岡で出迎えを行い、長崎までの車中で本校教員から本校の概要や長崎の地理、文化等について、事前説明を行う。	ホームステイ交流、およびその他の交流ができなかったため中止。	評価 4 3 2 1	評価 4 3 2 1	評価 4 3 2 1	韓国テレサ高校は本校の姉妹校であり、両校ともホームステイ交流の復活を希望し、今後の新たな交流の形についても検討している。平成30年度は本校からのホームステイ派遣はすでに断念しているが、受け入れに関して前向きであることを先方に伝えて、先方でも検討中である。歴史認識を深め、実際に交流を行うことはグローバルな人材育成のために非常に重要であるため、今後も海外、特に同世代との交流を大切に発展させていく。	

事業項目	成果		活動		活動実績 (D)	成果目標に対する評価	活動目標に対する評価	総合評価	改善点 (A)
	目標	指標	目標	指標					
③英語の多聴多読	英語の読解力とリスニング力を向上させる。教員研修によって、多聴多読の現状と必要性及び教育方法等の知識を深め、教員の指導能力を向上させる。また、英語(言語)運用能力・コミュニケーション能力(聞く・話す・読む・書く技術)の向上にとどまらず、文学を楽しむ、音声の聞きとりにより表現力の向上を目指し、豊かな感性を磨き、「心豊かな人」づくりを行う。	英検、GTEC、模範試験などの外部試験の結果の確認、及び生徒の授業以外での多聴多読読書記録・ノート作成により多聴多読に記録される英単語の、各生徒の読了累計語数を確認(英検:生徒の準2級以上の資格合格率を前年度と比較する。(前年度比:準2級以上の合格率10%増) GTEC及び模範試験:成績を前回の受験時と比較する。(前年度比:平均点数10%増) 事業前及び事業後の英語の読解力とリスニング力を把握し、目標達成に反映されたか確認(教員研修:研修報告の研修成果等の実践状況(具体的な指導時間数を含む)、事業前及び事業後の知識度や指導力等を把握するとともに、生徒の多聴多読への取組実績及びその量等(①の目標実現に反映されたか確認)	英語の授業で多聴多読を行う。また、教員の多聴多読先進校の視察研修を実施する。本校での多聴多読の効果及び他校での教育成果を把握し、今後の教育・指導の活性化に資する。なお、中学、高校の一貫した英語教育として、中学校から高校2年生までの全クラスにおいて、授業または朝読書や放課後などの時間に多読を実施する。さらに、英語(言語)運用能力・コミュニケーション能力(聞く・話す・読む・書く技術)に加えて、コミュニケーション能力を高める観点から、一部のクラスにおいて、英字新聞を活用し、世界で起きている事象に目を向けさせ、自分で考え、意見を持ち、それを表現できるよう、取組を進める。また、表現力向上のためにブックレポートやブックレビューなどを学年に応じて英語で作成することに取組む。屋休みの校内放送で英語による放送を実施する中で、多読用書籍の音声CDを使用することで、リスニング力の向上も目指す。	実施日:英語の授業及び放課後 会場:純心女子高等学校CALL教室 対象:中学全学年、高校1年生全クラス、高校2年生全クラス、高校3年生・文英コース生徒 内容:多聴多読 11月2日～3日 九州多読セミナー 福岡女学院中高 対象:教員1名 3月30日 英語4技能育成ワークショップ&セミナー 本校江角記念館 内容:多聴多読他英語教育講習会 講師:福岡女学院中高教諭 坂本彰男氏 対象:本校教員、他校教員	本校では英語の読解力とリスニング力の向上を主たる狙いとした多聴多読の実績にはあるが、各種研修会等の研究発表で調査報告があるのと同時に、書く力での伸びの大きさが、本校の英検GSEスコアからも顕著である。今年度高校1年生全クラスで毎週1時間の多聴多読授業がCALL室で実施されたが、全授業で多聴多読を実施できなかった高校2年生文英コース生徒と比較した場合、英検GSEスコアでは読解力、聴解力、書く力のいずれにおいても高校1年生がほぼ全クラスで上回った。中でも差が大きかったのが書く力でありその差はGSEスコアで約100点である。2016年度と2017年度の英検合格実績を比較すると、「前年比・準2級以上の合格率10%増」という今年度の目標は、準2級合格者の減少のため残念ながら達成できなかった。(合格率で見れば6.1%増加)しかし前年度比4月在籍数44名減、学校申込受験者数が93名減であるにもかかわらず、3級で-4の64名、準2級で-10の67名、2級では合格者倍増の34名となった。各級とも一次試験のみの合格者数も増加した。GTECのここ3年間の成績推移を見ると、3技能Basicテストを受験した高1の国公立コースとI類の結果は、著しく向上とは言えないものの受験時期も考慮すると上向きである。高2は異なるコースの生徒が別のテストを受験したため、点数上の比較はできない。高3は受験者数にばらつきはあるものの国公立コースの生徒を中心に、一部生徒が受験し順調に向上傾向を示しており、様々な学習を重ねた生徒たちが徐々に成果を示しつつある、ととらえられる。感性を磨き「心豊かな人」づくりを目指すという点については、年度途中に実施した多聴多読に関するアンケート調査の結果、いずれも昨年比で「英語の本を読むのが楽しくなった」で7%増の89%、「英語を話そうという気持ちが高まった」で7%増の72%など昨年よりも肯定的な回答が増えている。また「本を読むのが楽しい」「音を聞くのが楽しい」など昨年度に続き90%以上が肯定的であり、目標は概ね達成されている。	九州多読セミナーが本校の学園祭日程と重なったため、今年度は1名しか参加できなかった。また校内での多聴多読関連セミナーも年度末により早く開催の運びとなったが、日程的に全教員の参加は難しく、目標を十分達成できなかった。高校2年生までの全クラスでの多聴多読授業実施はできなかったが、朝読書の時間帯や休み時間、放課後には英語多読が可能となるよう書籍を各教室に20冊～30冊配置し、ほぼ毎月新しい本が読めるよう整えた。ただしアンケート調査の結果、教室用多読書籍を読んだことがある生徒は、多聴多読授業があるクラスで44%、ないクラスで56%であり、改善の余地が大きい。教室用多読書籍を利用する時間としては授業があるクラスでは約7割が朝読書で利用しているのに対し、ないクラスでは朝読書と休み時間での利用がそれぞれほぼ同じ4割であった。また授業の有無にかかわらず屋休みや放課後の利用が大変多い点が特徴的で改善の余地は大きい。	平成28年度の評価では、生徒の学習意欲や英語への関心の部分での成果が確認できないとし、学力面での確認はできていないが、授業改善の必要性が報告されていたが、今回は英検GSEスコアからも多聴多読の成果が少しはあるが確認できたようである。今後さらに確認作業を続け、より多くの生徒に多聴多読の機会を広げる努力が求められる。教員研修、先進校視察に関しては昨年度以上に良い状況であり、反省点が多い。	さらなる成績向上を目指し効果的な多聴多読授業の実施。CALL室以外で図書館、授業外での多読活動の充実が必要である。そのために必要となることは、多聴多読用の書籍の継続的な購入、教員の資質向上のための研修への参加や先進校視察、CALL室以外(図書館、教室)での多読や多聴多読のための関連設備の充実、英語科以外の教員にも理解を深めてもらい、協力してもらうことなどが必要となる。内的動機づけで本を手にとるという行為が本来アクティブラーニングの要素である自発性と直結しており、4技能習得に効果が高いだけでなく、自律的学習者を育てるキャリア教育に通じることが全職員に理解してもらえよう英語科として努力することが一層必要である。	
④ハウステンボス英語研修	英語を話す自信を付けさせ、積極的にコミュニケーションを円る態度を育てる。	生徒アンケートによる自己評価(英語(言語)運用能力・コミュニケーション能力(聞く・話す・読む・書く技術)、積極的会話等、事業前及び事業後の生徒の英語の会話能力や取組み姿勢、自信度を把握し、目標実現に反映されたか確認)	イングリッシュスクエアで英語研修を実施する。英語の実践能力やコミュニケーション能力を向上させる。英語学習に対する動機付けとするのはもちろん、これ以降も自発的に学び続けるように工夫し、授業だけでなく日常的に英語に触れる機会を増やし、実践の場とするなど、一時的な効果とならないよう努める。なお、受入人数の関係から、参加するのは1クラスに限定されるが、他のクラスについても英語に触れる機会を増やす観点から、様々な機会に英語に接する時間を増やすなどの工夫を行う。例:英語や国際関係の掲示物、生徒作品を校内に多く展示する。ネイティブスピーカーの外国人教師による「イングリッシュ・ランチ」を英会話授業のないクラスで実施し、グローバルな興味関心を高める。	実施日:6月26日(月) 会場:イングリッシュスクエア 対象:高校2年生文英コース生徒 内容:英語研修 10:30-12:00 「シチュエーション英語」 12:55-13:55 「街頭英語」 14:05-15:05 「ワークショップ」 15:15 「修了式」	アンケート調査の結果、「コミュニケーション能力向上が実感できた」79%、「英語学習のモチベーションがアップした」75%など、英語運用能力向上および積極的にコミュニケーションを図る姿勢の強化につながる肯定的な評価が確認できた。生徒は日常の英語学習が実際の言語使用場面でも有効であることを再確認し、その後の更なる学習へと動機づけられた。	ハウステンボスでの英語研修は今年度も2年生文英コースでのみ実施したが、その他さまざまな取り組みをアップした75%など、英語運用能力向上および積極的にコミュニケーションを図る姿勢の強化につながる肯定的な評価が確認できた。生徒は日常の英語学習が実際の言語使用場面でも有効であることを再確認し、その後の更なる学習へと動機づけられた。	学習動機づけとして、また自信を付けるために、英語研修が有効であったことは、3年間実施した手ごたえだけでなく他コースとの英検などの結果を比較して明らかである。ただし英語研修の機会は費用や時間の制約が大きいため、それ以外の手立てが英語コース・英語選択以外の生徒たちのために一層必要である。動機づけの機会を増やし、生徒が年間を通じて抵抗なく英語に接し、より広い視野で自身や周囲を見ることができるよう3年間毎年改善を行った。英語検定の合格実績やGSEスコアからは、運用能力の改善傾向はみられるものの顕著な効果が出たというためには、今後一層の研究とより良い教育活動の実施が必要である。	英語を話す自信を付けさせ、積極的にコミュニケーションを図る態度を育てるために、英語コースや英語選択の生徒達にはこれまで同様外部での英語研修を実施し、さらに発展させる方策を探ることが可能である。その他の生徒たちのために、楽しみながら英語で学習し、発表し、交流する機会をさらに増やす必要がある。具体的には「イングリッシュランチ」の実施も、英会話授業がなく、英語授業数が少ないクラスで重点的に行う、内容をよりコミュニケーション活動中心に変更するなど実施方法改善が可能である。間接的な方法だが、教室内外での英語書籍や掲示物の増加、英語放送の充実等を通じて全生徒への効果を狙うことができ。さらに希望者を対象に校内英語学習会、外部業者による各種セミナーやプログラムの導入、CALL室でのオンライン英会話導入なども導入を検討する。	
					評価 4 ③ 2 1	評価 4 ③ 2 1	評価 4 ③ 2 1		

総合評価  
4 ③ 2 1

判断理由  
平成29年度:計画した活動はほぼ実施できた。目標とするグローバル人材に関する共通理解も少しずつ得られ、英語4技能習得を目指した様々な取り組みも試行錯誤を経て次第に成果を出しつつある。一方で教員研修の充実や学校全体の活動や教科間の連携、また3年間を見通した取り組みに関しては今後一層改善の余地がある。  
3年間:一般的なグローバル人材の把握から始まり、本校が目指すグローバル人材像の具体化へと徐々に教員の理解が進み、共有されるようになった。しかし生徒への継続的な意識付けや各教科、コース、学年、各委員会での具体化、さらには教科間、学年間の連携はまだ十分ではない。英語運用能力向上に関しても今後さらなる努力が必要である。